

グローバル連携による専門性と語学力強化を図る 「ホスピタリティ教育」教授法の研究Ⅱ 「ホスピタリティと観光」におけるイベントマネジメントの実践

森 越 京 子 吉 田 かよ子 田 中 直 子

Kyoko MORIKOSHI Kayoko YOSHIDA Naoko TANAKA

目次

1. はじめに
2. 本研究の目的
3. 「ホスピタリティと観光」授業実践
 - 3.1. 履修者
 - 3.2. テキスト・教材
 - 3.3. 授業内容
 - 3.4. イベントマネジメント
 - 3.5. 成績評価
 - 3.6. 学生からのフィードバック
4. 考察
 - 4.1. 教育的な意義
 - 4.2. 問題点と課題
 - 4.3. 今後の可能性
5. 結論
6. 資料
 - 6.1. 平成24年度短大英文学科公開講座
 - 6.2. 平成25年度短大英文学科公開講座
 - 6.3. 平成26年度短大英文学科公開講座

[Abstract]

Research on Hospitality Education to Develop Expertise and Language Skills Based on Global Linkage: Practice of an Event Management in "Hospitality and Tourism" Class

This article provides an outline of the classroom practice in "Hospitality and Tourism" class at Hokusei Gakuen University Junior College English Department. The class consisted of two main parts: English lectures and an event management as the class covers both theory and practice of hospitality and tourism studies. It also reports the details of the teaching materials and procedures in the class and discusses how the events were managed in the class. The event management was extremely well received by the students and became a valuable experience for them. This experiential learning provided opportunities for the students to use their English skills in the real situation. Learning from guest speakers who actually work in this field, the students were encouraged to explore their future careers. Furthermore, the class was considered as a practice of Content and Language Integrated Learning (CLIL) which was believed to foster language learning. Lastly, pedagogical implications of the class are discussed. This report on a CLIL practice and the experiential learning through the event management will give new perspectives to educators in English education, hospitality education and career education.

1.はじめに

本稿は、北星学園大学短期大学部英文学科において、平成23年のカリキュラム改訂により導入されたホスピタリティ教育関連科目「ホスピタリティと観光」の教育内容とイベントマネジメントの実践について報告するものである。

本学科では、英語の4技能である「聴く・話す・読む・書く」力を伸ばし英語コミュニケーション力を高める基礎的な教育を1年次に実施し、身に付けた英語力を活かし、2年次に英語を使って一般教養を学ぶImmersion

教育・Content-Based Instruction（内容中心の指導法）を早くから取り入れ、アカデミックな英語学習環境を整備してきた。

昨今のグローバル人材育成への社会的な関心の高まりや、本学学生の卒業後のキャリアを意識したカリキュラムの必要性から、ホスピタリティ教育関連科目である「総合講義ホスピタリティ」「インターンシップ」「ホスピタリティと観光」の3科目が2011年度に学科専門科目として導入された。これは、就職を希望する学生の多くが、航空業界、ホテル、観光などの仕事に興味を持っており、実際に多くの卒業生がその分野で働いているためで

キーワード：英語教育、ホスピタリティ、キャリア教育、内容言語統合型学習
Key words: English Education, Hospitality, Career Education, CLIL

もある。また、海外での就職を希望する学生のニーズや、将来的に企業のグローバル化が進むことへ対応できる人材育成を目指したためでもある。中でも「ホスピタリティと観光」の授業は、2年生に向けて開講する科目で、英語のテキストを用いて、英語でホスピタリティと観光の分野の基礎的な概念を学び、学んだ内容をイベントマネジメントというプロジェクトを通して、活用していくことを目標とした授業であり、理論と実践を融合した授業展開となっている。科目導入から3年が経過したことから、授業実践の教育的意義や今後の展望について考察する。一方、授業運営上の問題点や改善点についても明らかになっており、それらについても報告する。本稿では、主に教員側からの視点に基づき、短大英文学科における、イベントマネジメントの実践を取り入れた「ホスピタリティ教育」について議論する。本報告が、今後の英語教育、ホスピタリティ教育、キャリア教育の実践に、新しい視点をもたらすことを願っている。

2. 本研究の目的

本研究の目的は、短期大学英文学科に導入したホスピタリティ教育の一部である、新科目「ホスピタリティと観光」の実践について報告し、その内容を検証するものである。文献研究と実践研究の両面から、英語教育、ホスピタリティ教育、キャリア教育を融合した実践的なカリキュラムについて議論する。

3. 「ホスピタリティと観光」授業実践

3.1. 履修者

履修者数は、20名～30名の小規模なクラスであるが、イベント運営には最適な人数である。卒業後の進路としてすぐに就職を目指している学生が多く履修する傾向にある。4

年制大学への編入など進学を希望する学生が、この科目を履修し、観光ホスピタリティを専門の学問として将来学び続けることを奨励していきたい。

	平成24	平成25	平成26
履修者数	30名	26名	20名

3.2. テキスト・教材

この科目では、American Hotel & Lodging Educational Institute が出版しているテキストやDVD教材を活用した。テキストとして“Hospitality Today : An Introduction (Seventh Edition)”を採用し、初年度から2年間は、テキストの5章分を本学科用にカスタマイズして使用した。平成26年度からは、テキストを本学図書館に参考図書として設置した。また、DVD教材“Guest Service Gold”を活用してホスピタリティとは何か、ゲストサービスとはどのようなことか学んだ。これらの教材は米国を中心とした世界の高等教育機関や企業トレーニングのために開発されたものであり、英語を通して、ホスピタリティの概念やサービス産業の特徴について、また、良いゲストサービスの例について学ぶことができ、本学英文学科の学生にとって大変有益であった。しかし、学生にとっては英語のテキストを読むことに困難な面もあったため、教員がリーディングガイドとなる資料を作成し、学生がリーディング課題に取り組みやすいようにサポートを行った。教材の内容や文化的な背景が米国の例にとどまっているので、今後はアジアでのゲストサービスについてなど、他の国々や文化での具体例を学べるような教材の導入も検討していく必要がある。

3.3. 授業内容

授業は、テキストを使った講義とイベントマネジメントの実践からなっている。講義は英語テキスト“Hospitality Today : An

Introduction (Seventh Edition)”の中の、下記の5章を選択し、その内容を中心に進めた。
Chapter 1 : Service Makes the Difference
Chapter 2 : The Travel and Tourism Industry
Chapter 3 : Exploring Hospitality Careers
Chapter 13 : Managing Human Resources
Chapter 14 : Marketing Hospitality

学生は課題として事前に英語のテキストを予習してくるようになっており、各章の講義の最後に確認テストを行った。テストは担当教員がオンライン学習プラットフォームMoodleを用いて作成したもので、学生は授業の最後にネット上の確認テストを受けた。

さらに、学生が英語で学んだ新しい概念を復習し、その知識が定着するようにとの目的から、テキスト5章分の内容について中間テストの形で再度まとめてテストを実施した。

講義の中では様々なディスカッションやアクティビティが行われた。テキストの内容に合わせてディスカッショントピックが用意され、その内容についてグループでディスカッションを行ったり、自分の意見をMoodleに載せるなど、これらの活動はすべて英語で行われた。トピックとしては、次のような話題が含まれた。

- ・ “Why do you travel? Please discuss the reason why you traveled out of Sapporo most recently.”
- ・ “Let’s discuss good and poor service you received at hotels, restaurants, or shops.”
- ・ “What are advantages/ disadvantages of working in the hospitality industry?”

また、地域の専門家にゲストスピーカーとして、講義をしていただいた。下記の日本人専門家に “The Hospitality and Tourism Industries in Hokkaido ” をテーマに、それぞれの専門性を活かした講義をお願いした。北海道の観光の特徴、実際の仕事の場面での経験や最新の観光産業の動向など具体的な話を分かりやすい英語でお話いただいた。

平成24年 5月 9日

講師：市岡 浩子氏 (札幌国際大学教授)

平成25年 6月26日

講師：仙野 雅則氏 (加森観光)

平成26年 5月14日

講師：下田 知加子氏 (通訳案内士)

学生はゲストスピーカーの講義についてコメントを英語でまとめMoodle上に提出した。

3. 4. イベントマネージメント

「ホスピタリティと観光」のイベントマネージメントは、この授業の重要な部分となっており、毎年ゲストスピーカーを海外から招聘し、公開講座としてイベントを運営することができた。

イベント運営にあたり、クラスでは、役割分担を決めて、それぞれグループで活動を進めた。主な学生の役割分担と仕事内容は下記の通りである。

- ①司会：公開講座・学外でのセミナーにおいて、司会進行を英語と日本語で行う。一部講師の経歴について英語で紹介する。
- ②講師アテンド：講師に英語で手紙を書き本学や地域の情報を事前に知らせる。講師が札幌に滞在中、市内や学内の案内をする。ホテルから公開講座の会場までの案内。来学中の講師サポートを行う。
- ③受付・会場：公開講座会場に必要な掲示、資料作成、名札・名簿作成、イベント当日の会場設営 (PCの準備・照明・音響担当)。講師の経歴を英語から日本語にまとめ資料を作成する。
- ④広報：イベントのポスター作製と掲示。イベントの広報活動。短大ホームページへの活動報告をする。
- ⑤記録：イベントに関する記録として、準備や作業中の写真撮影や、イベント当日のビデオ撮影を行う。

これらの役割について、グループで準備を進め、必要なサポートを教員がしていく形となった。イベント終了後には、運営に関する振り返りとして、各自の取り組みについてMoodle上に、報告書を提出した。また、イベント後にグループ発表として、活動内容やイベントマネージメントについてそれぞれ報告する活動をした年もあった。

3. 5. 成績評価

学生の成績評価はMoodle上での5回の確認テスト、中間テスト、コメント、エッセイの提出状況、イベントマネージメントへの取り組みから総合的に判断した。Moodle上のテストスコアや、コメント、エッセイに対する教師側からの評価について、学生はネット上でいつでも確認することができた。

3. 6. 学生からのフィードバック

授業の最後にMoodle上で、アンケート調査を行った。被験者の数は、平成24年度21名、平成25年度25名、平成26年度19名となった。今回は、学生からのフィードバックの一部について報告する。

「ホスピタリティと観光」の授業について5段階評価で学生の意見を聞いた。そのうち「この講義は充実していて、とてもよかった」という項目に関して、平成24年度の学生は、「強くそう思う」66.7%、「そう思う」33.3%との回答をしており、全員が肯定的な評価をしている。この数字は、平成25年度「強くそう思う」36.0%、「そう思う」60.0%となり、平成26年度は、「強くそう思う」42.1%、「そう思う」57.9%となっている。どの年度も肯定的であるが、その内容は変化しており、初年度である平成24年度の授業に対する評価が高い。これは、平成24年度のみ公開講座に加え、学外でのセミナー運営を学生全員で行ったこと、さらにボランティアとしてニセコで開催されたセミナーへ参加した学生もあり、

多くのイベントに携わる経験をしたことが理由となった可能性がある。

次の質問項目である「この講義に参加したことで将来のキャリア（職業）についての意識が高まったと思う」には、平成24年度については、「強くそう思う」42.9%、「そう思う」47.6%、「どちらとも言えない」9.5%との回答であり、平成25年度は、「強くそう思う」52.0%、「そう思う」44.0%、「どちらともいえない」4%であり、平成26年度は、「強くそう思う」36.8%、「そう思う」42.1%、「どちらともいえない」21.1%との回答があり、この講義の受講からキャリアへの関心が高まったと言える。

「この講義に参加したことであなたのコミュニケーション力が高まったと思う」の項目に関しては、平成24年度「強くそう思う」19.0%、「そう思う」52.4%、「どちらとも言えない」23.8%、「そう思わない」4.8%との回答であり、平成25年度「強くそう思う」4.0%、「そう思う」60.0%、「どちらともいえない」24.0%、「そう思わない」12.0%となった。平成26年度は、「強くそう思う」10.5%、「そう思う」42.1%、「どちらともいえない」31.6%、「そう思わない」15.8%となっている。学生からの視点では、それほどコミュニケーション力が上がったという意識はないようである。

「公開講座の実習（運営）は、充実していてよかった」の項目では、平成24年度「強くそう思う」90.5%、「そう思う」9.5%、平成25年度「強くそう思う」48.0%、「そう思う」48.0%、「どちらともいえない」4.0%、平成26年度は、「強くそう思う」47.7%、「そう思う」42.1%、「どちらともいえない」5.3%、「そう思わない」5.3%となっている。一方、「公開講座の実習（運営）に、一生懸命取り組んだ」の項目には、平成24年度「強くそう思う」71.4%、「そう思う」23.8%、「どちらとも言えない」4.8%、との回答であり、平成25年度「強くそう思う」60.0%、「そう思う」32.0%、

「どちらともいえない」8.0%であり、平成26年度は、「強くそう思う」36.8%、「そう思う」47.6%、「どちらともいえない」5.3%、「そう思わない」5.3%となっている。

公開講座への取り組みに関して、平成24年度のほうが学生の取り組み方、また、充実感が高いようである。しかし、教員側からすると、イベントの運営に関して、平成24年度は、プログラム初年度ということもあり、不慣れな点も多く、様々な問題点や困難な点が多かった。しかし、年々スムーズな運営に改善されるようになり、平成26年度の学生の司会の様子やイベント準備全般の状況から、イベントの運営に関して、さらに良いものとなっているとの印象がある。それは教員側の慣れなのか、前年度の実績を踏まえて、機械的に準備を進めてしまったことが原因かもしれない。また、初年度は開催イベントが多く、平成25年度・26年度はその内容を一部変更して実施していることもあるので、このような結果になった可能性がある。授業として実施可能で長く続けるイベントとして、その内容、イベントの規模、学生の役割については、これからも最善の方法を検討していく必要がある。

「この講義の内容、課題、授業の進め方等、気がついたことを自由に書いてください。」の項目への学生の回答では、平成24年度は、イベントマネジメントに対する記述が最も多く、「大変貴重な経験ができた」「大変であったがみんなでセミナーを作り上げたという達成感があった」などの意見が多かった。また、テキストを用いた授業の進め方に関して、「テキストを読むのが大変である」という意見と、「興味深い内容のテキストなのでじっくり読みたい」との両方の意見が出された。

平成25年度は、「ゲストスピーカーをお招きして、話を聞くことはすごく良かった」続いて「イベントを運営できて良かった」との回答が多かった。

平成26年度も、「ゲストスピーカーからお

話を聞くことができて勉強になった」など、ゲストスピーカーに関するコメントと、「イベントマネジメントの実習が良かった」との意見が出された。また「講義とイベントのバランスや進め方も、このままで良い」という意見も出た。

4. 考察

「ホスピタリティと観光」の授業に関して、その講義内容・実践について教育的な意義と問題点、今後の可能性について述べる。

4. 1. 教育的な意義

(1) CBI/CLILとESPの視点から

ホスピタリティと観光をテーマに英語を学習手段として使うことができたことは、Content-based Instruction (CBI) (内容中心の指導法) や、Content and Language Integrated Learning (CLIL) (内容言語統合型学習) などの、「教科学習」と「英語学習」を統合した教授法の実践につながり、学生の英語4技能を高め、英語教育の質的向上をもたらすものと期待される。

山岸、高橋、鈴木 (2010) によれば、内容中心の指導法 (CBI) は、1) 理解可能なインプットがされた時、内容理解が言語習得を促す、2) コミュニケーション能力を高める方法として優れている、3) 学習者の要求や必要性に対応した教え方をするので、学習者にとって自分が必要とすること、実際に使えることを学ぶ利点がある、また、4) 内容と言語を同時に学ぶ効率の良さがある、とされている。これらのことは、「ホスピタリティと観光」のクラスにもあてはまり、短大部英文学科の学生にとって最適な教授法の一つであると言える。また、この授業は、3) の学習者の必要性や実際に使えることを学ぶという点で、本学科の学生の興味や将来のキャリアに直結する観光やホスピタリティの分野に特化していることから、English for Specific

Purposes (ESP) の実践であるとも言える。

さらに、「ホスピタリティと観光」の科目は、CBIの一つであるとされることも多いCLILの実践とも言える。

「CLILの基本原理」の中で池田は下記のようにCBIとCLILの共通点と相違点を述べている。共通点として

- ・学習内容＝教科やテーマなどの内容のあるものを学習の中心に据える
- ・学習言語＝内容学習のためのツールとして英語を使う
- ・学習活動＝オーセンティックな教材を用いた4技能統合型のタスクを行う
- ・学修成果＝知識力、言語力、思考力の3つが育成される
- ・学習理論＝理解可能なインプットを与え、教師や仲間と意味のやり取りを行う(渡部, 池田, 和泉, 2011, p12)

を挙げているが、CLILのほうが語学教育の完成度は高いとして、CLILの「4つのC」(Content, Communication, Cognition, Community)の融合について述べている。

本学科の「ホスピタリティと観光」の授業においても、学生は、ホスピタリティと観光を学習内容として、英語を学習ツールとして使って学び、オーセンティックな教材である英語テキストやホスピタリティ関連のDVDを用いて、英語4技能の習得に努力をしている。例えば、リスニング(英語の講義を理解する・ゲストスピーカーの講演を聞く)・スピーキング(グループディスカッションやゲストスピーカーと英語でコミュニケーションする)・リーディング(英語テキストを読む)・ライティング(トピックについて意見を英語で書いて提出する, ゲストスピーカーの講演に関してコメントを英語で提出する)をバランスよく取り入れている。また、学修成果として、ホスピタリティ分野に関する知識を深めるだけでなく、そこで使用される語彙や英語表現などの習得につながっている。さらに、学習理論

である、理解可能なインプットから、学生間のコミュニケーションを行ったり、教員やゲストスピーカーとも英語でコミュニケーションを行う活動を取り入れている。

本学科の取り組みは、CLILの特徴である「4つのC」に関しても、すべてを網羅している。具体的には、15回の授業を通して、ホスピタリティと観光をContent(内容)として学び、講義の部分でもイベントマネジメントの部分でも、学習ツールとして、Communication(言語)、この場合、英語を使用し、また、この分野のキーワードの確認や、スタディガイドを使った、英語テキストの読み方の指導も行っている。言語知識が与えられるだけでなく、さらに言語技能を活用する機会がある。また、講義を聞くだけではなく、グループディスカッションや、イベントマネジメントの準備・運営という様々な思考(Cognition)を必要とするタスクに取り組む。学生はCLILで述べられている基礎的な思考力だけでなく、活用型の思考力を使う。例えば、ゲストスピーカーのアテンド担当の学生は、ゲストへの対応として、キャンパスを案内するが、案内に必要な英文を覚えるという基礎的な思考力だけではなく、どのようなタイミングでどこを案内し、どのような会話をするのが適切かを事前に分析したり、深く考えることが求められる。また、この授業では、Community(協学)の要素である、他者と話し合い、グループで協力しあう協同学習が中心となっている。さらに、海外からのゲストスピーカーをお招きし、異文化理解や国際理解を促進する活動ともなっている。

このようにCLILにつながる英語教育の実践が出来たことは、担当教員3名が、語学教師であり、また、ホスピタリティや観光分野での仕事の経験があったり、その分野の研究者であるということに起因している。さらに、国内外のネットワークを活用し最適なゲストスピーカーを招聘できたことも重要な要因であ

る。

(2) Global Standard と World Englishes

本科目では、ホスピタリティと観光の分野において海外の大学で用いられるテキストや、企業のトレーニングに使われるDVDを活用し、Authenticな教材を提供することができた。学生は質の高い教材を通じてホスピタリティと観光の分野について学ぶと同時に、学問としての同分野のGlobal Standard(世界的な基準)を知る貴重な経験をしたと言える。テキストには学生にとって新しい概念も多く含まれており、難解な部分もあったようだが、ホスピタリティと観光の分野は、一般的に身近な話題やトピックが多くあり、学生にとっては取り組みやすい内容でもあった。また、そのような内容を学問として理論的に学ぶということは、興味深いことであったようだ。

非英語母語話者である担当教員やゲストスピーカーから英語で講義を受けることにより、学生は様々な英語World Englishes(世界諸英語)に接する機会を持つことができた。多くの研究者が指摘するように、現在、非母語話者同士の英語コミュニケーションの機会が多いことは明白であるが(Kachru 1992)、学生は本科目において、グローバルな世界で非母語話者がどのように英語を使い活躍しているのかを目の当たりにする機会を得て、英語学習に対してより明確な目標を持つという点でも有益な経験となったと思われる。“English as an International Language,” “English as a Lingua Franca,” “English as a Global Language”といった様々なとらえ方があるが、英文学科の学生が欧米の文化にだけ関心を持ったり、ネイティブスピーカーが使う英語だけが正しいとするような姿勢から、アジアやそこで使われている英語にも目を向けるようになったと言える。アジアからのゲストスピーカーをお招きでき、世界には、様々な英語のバリエーションがあり、英語非

母語話者とコミュニケーションをしていくことが将来多々ある可能性ということを認識できた点が評価できよう。

さらに、3年間の公開講座の概要からわかるように、それぞれのゲストスピーカーの講演内容は素晴らしく、アジアの様々な国の観光やホスピタリティ産業について最新の情報を得ることができ、良い刺激を受けた学生が多かった。また、どのゲストスピーカーも、語学学習の重要性、語学力を持った人材の将来性について述べており、学生に希望を与え、やる気を起こさせる内容であった。さらに、アジアからのゲストスピーカーと英語を使ってコミュニケーションをした経験や、そのゲストスピーカーが学生との英語でのコミュニケーションを温かくサポートしてくれたことが、学生にとっては貴重な経験につながった。これもグローバル連携により最適なゲストスピーカーを招聘できたことが成功の要因である。

(3) Experiential Learning (経験学習)

受け身でない「実践的」学びの機会により、チームで作業を進める体験、自分の役割に責任を持つこと、他者への配慮、協力することの重要性を経験することができた。イベントを運営するにあたり、学んだ知識を実際に活かす経験ができたことは学生にとって大変有益であった。また、この経験から言語だけでなく観光ホスピタリティの実践について学んだことで、この“Experiential Learning (経験学習)”は、多くの研究者が述べているように、学生の学習に対するモチベーションを高めた(Kolb, 1984; Lau & Wong, 2010)。イベント終了後「もっと英語力を伸ばしたい」、「英語コミュニケーション力を高めたい」とのコメントが多くみられた。特にイベント運営の中でも英語を良く使う、司会通訳や、ゲストスピーカーのアテンド系の学生は、事前に必要な英語表現を学び練習してイベントに臨むことができ大変貴重な経験となった。

(4) ICTの活用

「ホスピタリティと観光」の授業は、コンピューターを使用できる教室で実施したこともあり、学生のICTスキルの向上に役立ったと感じている。講義内容に関する小テストや中間テスト、コメントの提出に、Moodleを活用したり、必要な情報や、資料をMoodle上で提示した。また、学生はプレゼンテーションの準備にあたり、Dropbox, Google Document やPreziといったオンライン上のソフトやアプリケーションを使うことがあり、在学中にこのようなスキルを磨くことも、学生の将来のキャリアに役立つと考えられる。

(5) キャリア教育

テキストで学んだ知識を、ゲストスピーカーの講話から再確認できたこと、また、実際に観光ホスピタリティの分野で活躍されている人々から話を聞くことができたことは、学生にとって大変よい刺激になり、将来のキャリアについて考える良い機会となった。実際、受講生の多くは就職活動に対して意識が高く、2年生の早い時期に就職が決定していた。

4. 2. 問題点と課題

講義の部分で、グループディスカッション、英語コメントの提出などのアクティビティを取り入れることができたが、今後はこれらをさらに発展させて、授業内でプレゼンテーションをする機会を増やしていきたい。

また、イベント運営の仕事分担に関してバランスの悪い部分があり、一部の学生に役割が偏ってしまうことがあった。今後は、学生の役割に関してその詳細を見直し、適正に分担をしていくこと、また、学生が自ら役割を見つけ、積極的にイベントに関わるできるようになるように指導していくことが必要である。

平成26年度は、時間的な制約からイベント作業後に振り返り(反省)をする時間を取るこ

とができなかったもので、グループで話し合い、クラスでプレゼンテーションの形で報告することができる授業展開を踏襲していきたい。

上記のような細かな問題点以外に、授業とイベントへの負担感の問題がある。この科目は、2年生の前期に実施され、学生の就職活動の時期と重なり、学生によっては授業とイベントへの取り組みが大きな負担と感じることもある。また、担当教員にとっても授業以外に、外部関係者との打ち合わせや、イベント開催にかかわる諸手続きなどの準備に多くの時間が必要とされた。さらに、これまでの3年間は、科研費に採択された研究の一部であることから、海外からゲストスピーカーを招聘し、それに伴う学外でのセミナー開催のための財政的な支援があった。今後は、財政的にも、また、学生と教員相方にとっての負担を軽減し、持続可能な形で授業運営の方法を考えなくてはならない。

4. 3. 今後の可能性

CLILの取り組みとして、学生の語学力をさらに伸ばすように、現在の授業内容の分析や改善を目指していきたい。また、「ホスピタリティと観光」の授業が、学生のキャリア形成にどのような影響を与えるのかについて調査する必要があると考える。

3年間の授業実践により、イベント運営ノウハウや必要な資料が揃い、今後の授業ではそれらを効果的に活用したい。例えば、司会通訳にあたっている学生の実稿は、次の学年の学生が参考にできる部分もあり、翌年以降も有効に使うことができる。また、前年度の学生の取り組みの様子の記録ビデオを見ることを通じて担当作業開始前に把握し、イベント運営をイメージしやすく出来るように支援していきたい。

学内の公開講座への参加者を増やす取り組みや、学外でのセミナーでも学生がより一層活躍するような機会を設け、地域の人々に本

学科の取り組みを周知していくようなイベントにしていくことが望まれる。

5. 結論

「ホスピタリティと観光」の授業は、3年間の実践を経て、CLILの視点からも、語学学習に大変効果的であると期待でき、また、様々な英語や文化に触れてグローバルな世界を見る貴重な機会を学生に提供してきたと言える。受け身ではない経験学習から学生のモチベーションを高めると同時に、キャリアに目を向けさせる良い機会となった。現段階では講義やイベントの運営において改善できる点が多々あるが、学生のフィードバックや卒業後の進路の分析からこの授業の在り方をさらに検証し、より良いものにしていく必要がある。

また、4.3.で述べたように、過年度のイベントマネジメントの「教材化」の可能性の検討に取り組みたい。3年間の学内外での実践学習は履修学生によって、主として映像資料として保存されている。本教科の特色の一つに挙げられるのがICTの活用(4.1.(4))であり、Moodle上に担当教員は長時間をかけて教材を作成し、CBI/CLILのアプローチで授業を進めてきたことの教育的効果は、本論に紹介した学生の授業評価や進路選択等からも明らかである。過年度の実践成果の一部をMoodle上にアップロードし、教材として利用する手法は、通訳法Ⅱ、Ⅲといった本学科の他教科で使用されており、履修学生にとっては、教材からの知識習得と同時に、先輩諸氏の完成度の高い英語運用能力が学習の動機づけになることは実証済みである。イベントマネジメントをイベントごとに完結する演習ととらえるのではなく、このようにICTを活用して継続性を持たせることにより、本教科を英文学科の培ってきた英語教育の先進性を次世代へと引き継いでいくという目標の一端に据えたい。

6. 資料

6.1. 平成24年度短大英文学科公開講座

日時：平成24年6月27日(火) 2 講目

場所：北星学園大学図書館A教室

講師：Dr. Andy Nazarechuk

アンディ・ナザレチャック博士

Topic：The future of the International

Hospitality and Tourism Business.

タイトル：国際ホスピタリティ観光ビジネスの可能性

解説：吉田かよ子(短期大学部教授)

司会：柴田桃子・目黒実緒(短期大学部英文学科2年生)

講演内容

今日は、“The future of the International Hospitality and Tourism Business”というテーマで話をさせていただきます。いくつか写真を見せながら、新しいアイデアやいくつかの問題点についてまた将来の方向性について話していきます。また、最新のテクノロジーについても話をしたいと思います。

今日の授業ではいくつかルールがあります。みなさんスマートフォン持っていますか。このクラスでは、そのスマートフォンの電源を切るのではなく、“ON”にして使ってください。このようなことを言う先生は私が初めてでしょうね。いつでも使っていていいです。写真を撮り、FacebookなどのSNSでメッセージを発信してください。Facebookを使いこなすスキルは将来ホスピタリティ産業で大変役に立ちます。今は、友達と‘楽しみ’のために使っていると思いますが、Facebookは、将来あなたのビジネスネットワークとして使われます。

さて、経済について話しましょう。日本の経済は現在どうですか。あまりよくないですか。世界では何が起きているでしょう。世界では、多くの人々が中流階級になってきて

います。お金に余裕がでて、旅行にもお金を使うことができるようになってきました。“discretionary income (自由になるお金)”を持つようになったのです。その自由になるお金を持った人々は旅行をするようになります。今まで旅行をしていなかった人は、国内旅行から始めます。しかし、あなたがグローバルなマーケットを知るためには、外へ出ていかなければなりません。どこでもいいので海外へ行くことが大切です。何人くらいの方が海外へ行ったことがありますか。旅行すればするほど、あなたはたくさんのものを見ることができ、豊かな人間になることができます。

さて、世界的に、より多くの人々が旅行するようになっていきます。では、旅行者はどこに出かけているのでしょうか。香港に、中国人がたくさん出かけています。まずは近場の香港から、そして、中国人旅行者はこれから世界中を旅するようになるでしょう。まだまだ、旅行者としては初心者ですが、中国人はこれからどんどん旅行するようになるでしょう。ですから、彼らのことを学ばなくてははいけません。

観光について考えてみましょう。観光客が旅行に来ます。そしてお金を使っていきます。そして、そして国を去ります。観光って本当に素晴らしいですね。では、彼らは何を持って帰るでしょう。それは、Memory (思い出) です。観光が盛んになるとあなたの国の経済は良くなります。一方、観光客が多くなりすぎると地域を破壊することもあるので気をつけなければなりません。旅行者があなたの地域に来た時、旅行者が楽しんでくれるだけでなく、喜んでたくさんのお金を使ってくれるようにしなくてはならない。それには、楽しいアクティビティをたくさん考えなければなりません。楽しい食事やお酒、ダンス、ショッピングなどが、地域の経済にお金をもたらすのです。

日本はどうでしょうか。日本を何度か旅行しましたが、いくつか問題点もあります。まずは、日本の表示・標識についてです。大きな駅やバスなどはわかりやすいのですが、ほとんどの場所は英語の表示がなく、日本語が読めないで、大変混乱しました。

これは、シンガポールのマリーナベイサンズホテルです。みなさんが、将来ホスピタリティの専門家になるには、一度はこのホテルに宿泊し、ゲストが何を楽しんでいるのかを経験するべきです。こちらはフィリピンの広告です。“It’s more fun in the Philippines.” 更なる旅行者を獲得するための新しいマーケティングの例です。フィリピンは美しい国です。しかし、観光はまだあまり盛んではありません。フィリピンは危険だと思われるのかもしれませんが。ですから、そういう人々のためにもこの広告が作られました。このメッセージで、フィリピンは楽しい場所であると伝えているのです。現在、いくつかの問題点もありますが、フィリピンは観光でも良い結果を出しています。これは、国が旅行者を呼び込もうとしている具体的な例です。

さて、どのように観光地に出かけますか。交通網の話です。LCCが増えました。そのおかげで、誰でも旅行できるようになりました。お金を持っている人でも、将来、LCCを使う可能性があります。LCCのおかげでたくさんの人が旅行できるのです。

旅行するときに大切なこととして、旅行者の“Expectation (期待)”があげられます。5つ星ホテルに高い料金で滞在したら、あなたの期待はかなり高いものになります。そこで、何らかの問題があれば、すぐに不満に感じるでしょう。期待値が低ければ対応しやすく、安いホテルや安い航空会社は、良いサービスを提供するのは簡単です。格安のホテルは、お客様の期待に沿うようなサービスを続ければ、“Value (お得感)”と思われ、さらに多く旅行者を獲得できるでしょう。経済が

低迷しているときは、特にお金の使い方に慎重になる旅行者ですから、“Value（お得感）”というのは大切であり、“Poor quality is no longer acceptable（質の低いサービスはもう受け入れられません）”。この良い質ということにこだわり仕事をすれば、あなたのビジネスはうまくいくでしょう。

テクノロジーについて話をします。Facebookは、たくさんの人にメッセージを伝えることができる大変便利なツールだと言えます。Facebookで一躍有名にもなれます。SNSを使ってお店の宣伝をすることもできます。SNSは将来ますます重要になるでしょう。SNSは将来便利なツールですが、問題も抱えています。不満があれば、Facebookにコメントを載せて、多くの友人に伝えることができます。「このホテルは汚い」と写真を載せることもできます。これはメディアの力です。

ホテルでは、定期的に新しい部屋をデザインします。これもテクノロジーですぐにできます。これはホテルの部屋をデザインするソフトウェアです。これによって実際に部屋をつくる前に、どのように見えるか確認することができるのです。こういうツールを使いこなすスキルを在学中に身につけてください。卒業時には、他の人が持っていないスキルを持ってください。

さて、ビデオをお見せします。人々が現在どのような研究をしているかお見せします。これはホテルや観光とは直接関係ないものです。このような新しいテクノロジーをホスピタリティ産業に取り入れていくことを考えてほしいです。

アジアのブランドについて話してみましょう。日本で有名なホテルはどこですか。日航ホテル、マリオットホテル、ヒルトンホテル、などなどが一般的です。しかし、新しいブランド、高いサービスを持った、違った環境を与える、新しい経験ができるブランドがもっと必要です。

Going Green：日本は、環境に優しいですね。この業界でも環境に配慮したホテル、レストランということが大切です。昨今、会議を開くとき、環境問題に配慮していることが求められます。では、ホテルにとってなぜ環境に配慮することが大切ですか。もちろん世界の環境を守るからです。さらに、ホテルは経費を削減することができます。リサイクルできる製品を使う、大きなボトルのシャンプーを使う、お客が家に持ち帰るようなブランドの商品にかえることもできます。環境へ配慮しているということで、会社のイメージを良くすることができます。これもマーケティングの決断の一つです。

MICEは、Meetings, Incentives, Conventions, Exhibitions/Events からなっています。ミーティングビジネスで働くと、ホテル宿泊から会議の会場まですべて完璧に準備することができます。Incentives は、報奨旅行であり、とても面白いです。Conventions は会議・食事・ショー・ミーティングなどすべてが含まれます。テクノロジーの発達でMICEのビジネスは減ると考えられていましたが、逆に、MICEは、ネットワークをつくる場になってきています。すべてのイベントは異っており、あなたはクリエイティブでなければならない。

女子学生の皆さん、みなさんは将来リーダーになるべきです。リーダーになるにはいろいろと「恐れ」があると思います。しかし、リーダーとして、take risks（リスクを負うこと）、失敗してもそれから学ぶことが大切です。リスクを覚悟し、make decisions（決断をする）方法を学ぶ必要があります。リーダーは最後に最善の決断をしなくてはなりません。リーダーになることに興味があれば、「やってみよう、リスクを負ってみよう」と思えること、そしていろいろと挑戦してみること、たくさんの決断をして、“You can do it（あなたはできる）”と知ることが大切です。

みなさんの将来について話します。新しい

世界基準について、いつも学ぶ姿勢を持ちましょう。ホスピタリティについて興味があれば、それについてたくさん読みましょう。インターネットには最新の情報が載っています。あなたの将来についてたくさん読んでみましょう。ホテルのマーケットについて興味があれば、そのことについてたくさん読んで、将来に備えましょう。授業は、自分で考える力を与えます。ホスピタリティに興味があれば、ホテルなどに実際に足を踏み入れてみましょう。将来のキャリアの準備をしましょう。また、いろいろな教育プログラムを活用しましょう。今やオンラインで参加できるプログラムもたくさんあります。最後に、誰が将来を担いますか。みなさんです。未来は明るいのです。旅行は世界を変えます。

ありがとうございました。一所懸命勉強して将来活躍してください。

6. 2. 平成25年度短大英文学科公開講座

Topic : The International Tourism in Thailand
and the Role of Hospitality Education
for the Future of the Tourism Industry
タイトル : タイにおける国際観光と観光産業
の将来のためのホスピタリティ教育
の役割について)

講師 : Ms. Veera Pardpattanapanich
(デュシタニカレッジ学長・Rector of
Dusit Thani College)

講演概要

[タイの観光産業]

タイでは、1967年に国際観光が本格化しました。その当時は、年間約33万6千人の旅行者がタイに来ていました。しかし、その数が大幅に増え、2007年には、1,450万人に達し、世界の中でも17番目に旅行者が良く訪れる国になりました。2011年には2,230万人に達しました。日本は先進国で、これまであまり観光に重点を置いていなかったようですが、近

年、観光に力をいれていると思います。2008年に出されたEuromonitor Internationalの報告によると、世界の人気観光地として、タイのバンコックは第3位にランクされました。タイでは主に、アジア太平洋地域から旅行者が訪れます。マレーシア人と日本人が、1位2位にランクされます。2007年から、ロシア人旅行者も新しいマーケットとして育っています。さらに、55%の旅行者はリピーターです。これはタイにとってはとても良いことで、リピーターの旅行者が何度もタイを訪れ、さらに新しい旅行者が加わりますので、タイへの旅行者の数は年々増えています。これまでは海外からの旅行客が中心でしたが、国内旅行者も増えてきており、現在では、海外からの旅行者からの収入と国内旅行者からの収入はほとんど同じレベルになっています。

タイは、これまでは東南アジアの観光地として独占的な立場にありましたが、最近では近隣諸国との競争が激しくなっています。そのため、これまでのマーケットを保持し、さらに新しいマーケットを開拓する努力や新しいサービスの提供などを試んでいます。たとえばゴルフ観光やメディカル観光の分野です。タイの観光を伸ばすために、国際市場用に“Amazing Thailand”、国内用に“Unseen in Thailand”というスローガンをうっています。タイの魅力というのは、美しいビーチや南国の島々、ダイビングスポット、ナイトライフ、建築物、美術館、宮殿、大きな寺院、世界遺産、などがあります。タイ料理も魅力の一つです。タイマッサージ、国のお祭り、象も観光資源です。ショッピングモールやマーケットでの買い物も人気です。

[世界の観光産業]

世界的な観光の状況について話をすると、旅行者の数は増えています。また、旅行者のマーケットが変化しています。観光の中で競争が激しくなっています。旅行者層が変わっ

てきています。テクノロジーを駆使できる人が顧客をつかむことができます。

また、テロの危険性や、世界的な経済危機、新しいウイルス感染症などが観光に影響を与えるリスクや危機が大きくなってきています。さらに、世界的な温暖化と自然災害が影響を与えます。それにより環境に配慮した取り組みも重要とされています。

旅行者の行動にも注意を払っています。旅行者は、経済的な状況によって、旅行へのお金のかけ方や、行き先も変わってきます。また、特別な観光を求めています。医療やスポーツ観光も人気を集めています。さらに、社会的責任という概念や持続可能な観光への意識も高まっています。

[タイの現状]

タイの状況について詳しく話すと、津波などの自然災害や、政治的不安定などが観光に影響していますが、今年は、旅行者の数も回復してきました。タイでは、東南アジアやヨーロッパが主なマーケットですが、国内の旅行者数も伸びてきています。ホテルやレストランが観光産業の中でも特に重要です。しかし、タイの交通網には問題があり、現在、道路などの整備や、他の交通手段の整備に取り組んでいます。数年前洪水や森林火災、伝染病の問題がありましたが、それらの問題にうまく対応しています。タイでは、安全性や法の整備についてまだまだ改善が求められています。中央集中型の観光政策でしたが、地方の参加、地方の分権を進めています。

[タイ観光の可能性]

いくつかの観光地の衰退を経験し、それらの問題解決を図っています。タイは、世界的な観光地の中でも競争力を伸ばしており、美しい観光地や、天然資源、世界レベルの観光資源があることは本当に幸運です。タイの強みは、国を挙げて観光産業に力を入れている

点で、天然資源や伝統的な芸術や文化を持っていること、タイ人の礼儀正しさにあります。また、企業が観光に投資していることも挙げられます。観光のインフラが整っており、国際マーケットでの経験が豊富であることも我々の強みです。

しかし、様々な問題点も抱えています。交通網の問題、観光地の衰退、政府の管理体制、また安全性や風俗営業といった否定的なイメージ問題、人材不足、観光発展のために専門的な知識を有する専門家がいないことがあげられます。また、人材だけでなく財政面での限界もあります。しかし、チャンスもあります。世界的な観光の発展に伴い、医療ツーリズムを含む、新しい分野の観光業への取り組み、近隣諸国へつながる交通網の整備、LCCの拡大、テクノロジーの発展で顧客とつながりやすくなっており、国際連携、国際的な協力など、観光の発展に向けての整備が進んでいます。

脅威となるのは、国際的な競争が激化することであり、世界的な経済状況をコントロールできないこと、テロ、自然災害、ASEAN地域での人材競争があげられます。

[タイの観光発展計画]

更なる発展のために、交通網の整備、観光地の再生と発展、クリエイティブな経済発展、タイについて良いイメージを作り出すこと、民間企業の参加、地方自治体の活躍が期待されています。

[観光産業の将来のためにホスピタリティ教育が果たす役割]

デュシタニカレッジを代表してお話すると、私たちの役割は、学生に必要な準備をさせて、人材育成という形で、産業を支援することです。新しいトレンドをうまくつかむこと、研究を通し新しい知識を提供し、業界の方向性を指し示すことも私たちの役割です。

新しいマーケットに必要なサービスを提供すること、たとえば中国人観光客に中国語ができるガイドを提供するなど、学生に新しいプログラムや設備を与えること、教育機関との連携を取り、ファカルティディベロップメントを行い、最新の知識を身につけること、などがあげられます。

ASEANには10か国が加盟し、一つのコミュニティとして、協力することが求められています。ホスピタリティ産業に関して、その能力に基づいた統一カリキュラムが提案されています。本学ではそのようなカリキュラムを持っており幸運です。さらに、様々なニーズに対応するようなサービスを与え、また、地域の文化を守りながら、様々な連携プログラムを立ち上げています。タイとしてもASEANの基準に見合った観光カリキュラムを作成していくことが求められています。これらがタイの観光の現状でタイが何をしなくてはいけないかということです。これらのお話を北海道の観光にあてはめて、将来あなたは何ができるか考えてみてください。

ありがとうございました。

6. 3. 平成26年度短大英文学科公開講座

Topic : Prospects for Hospitality and Tourism
Industry in Light of Changes in
International Tourism

講師 : Dr.Kaye Chon (Dean, School of Hotel
and Hospitality Management, Hong
Kong Polytechnic University)

司会 : 瀧本美咲・加藤里奈 (短大英文学科2
年生)

解説 : 森越京子 (短期大学部英文学科教授)

講義の概要

今回の講義は、次の三つのパートからなっています。まずは、香港理工大学について、次に観光産業における世界的な動向、最後

に、みなさんの将来のキャリアについて話します。

香港は小さな都市で、札幌と同じくらいの大きさですが、約700万の人口を有しています。香港には、8つの大学がありますが、香港理工大学は、もっとも大きく約2万人の学生がおります。ホテル観光経営学部は1979年に設立されました。私は2000年に香港に来ましたが、2004年に大学内の改変があり、我々の学部はビジネス学部から分かれ独立しました。ホテル観光経営学部は、2005年度世界で4位にランクされましたが、2009年には2位となりました。本学部には、様々なプログラムがあり、博士課程、修士課程、学士課程があります。2015年には、2年制の大学を卒業した学生のための2年間のプログラムがシンガポールで始まります。そのプログラムを終了すると、香港理工大学から大学の学位が与えられます。本学には、世界中から学生が来ます。また、交換留学生制度もあり本学の学生を海外へ送っています。

次に、観光について話します。世界の中心がヨーロッパからアジアへ、アメリカからアジアへ移っています。経済も観光もアジアへ移ってきています。2014年に、5億2,000万人がアジアを訪れました。しかしそのほとんどがアジアからの人々でした。つまり、日本人が韓国へ行き、韓国人が香港へ行き、香港人が、シンガポールへ行き、シンガポール人が日本へ行くというようなことです。その数は年々増えていて、アジアはこれからも成長していくでしょう。日本も1,000万人の外国人観光客が来ています。今後、さらに多くの人が日本に来るでしょう。そうするとさらに仕事が増えるでしょう。

アジアに関する興味深い統計があります。現在建設中のホテルの48%はアジアにあります。さらに40%は、中国です。アジアでは、更なる計画が進められています。観光教育に関してもパラダイムシフトが起きており、

ヨーロッパやアメリカから、アジアへその中心が移っています。

では、なぜ、アジアなのでしょう。まずは、アジアにはたくさんの方がいます。中国は13億人、インドは11億人、インドネシアは世界で第4位の人口です。また、アジアの人々が豊かになり、お金を持ち消費するようになり、世界を見たいと思うようになり旅行をします。さらに、アジアの人はビジネスがうまいということもあげられます。アジアのブランドは、世界で拡大しています。さらに、アジア人の教育水準は高く、アジアのホスピタリティは大変印象的です。日本人は大変礼儀正しいし、タイの方も大変丁寧です。アジアの人は、最高のものを求めます。最高のホテルはアジアにあります。また、サービスの質の高い航空会社もアジアにあります。良い空港もアジアにあります。「Asianess (アジアらしさ)」というのは私が作った言葉ですが、アジア特有であり、独自のアジアらしさに大変興味があります。

さて、これからの皆さんのキャリアの可能性について話をします。観光を発展させるために4つのことが必要です。まずは、観光地としての質です。札幌は、ウインタースポーツやオリンピック、札幌ビールが有名で、素晴らしい観光地ですね。また、喜んでその土地を訪れる旅行者が必要です。さらに、サービスを提供する人々も必要です。そのマネージャーつまりリーダーシップが重要となってきます。アジアの観光は1970年代に始まりましたが、その当時旅行者はほとんどヨーロッパやアメリカから来ていました。当時のアジアは貧しかったのでまだ旅行はできませんでした。リーダーも海外から来ていました。つまり海外から来るお客様についてよく知っており、また、同じ言語を話す専門家がヨーロッパやアメリカから来てもらうことが必要でした。しかし、現在、状況は大きく変わっています。アジアにはアジアからのお客様が来て

います。80%はアジアから来ています。20%だけがヨーロッパやアメリカから来ています。

リーダーに関してですが、これが問題です。アジア人のリーダーはまだ少ないです。これはアジアでの観光ホスピタリティ教育が遅れていたことによります。伝統的に、ホテルなどでもヨーロッパなどの方をリーダーとして招いていたようです。観光系の教育でも、ヨーロッパから始まり、その流れがアメリカに移りました。アジアは1960年代になって観光の分野の教育が始まりました。アジアでの教育はまだ歴史が浅く、リーダーが育っていないと言えるでしょう。

現在、私たちは岐路に立たされているといえるでしょう。ヨーロッパ方式に従うのか、アメリカのやり方か、また、アジアの独自の方法を探るのか。まさに、混乱している状況です。私たちはアジアらしい方法を見つける必要があります。アジア人のリーダーを育成することが急務です。

さて、あなたのキャリアでの成功のために6つのことを提案します。(1) Define "Purpose": まずは目的を定義し、(2) Goals: 目標を決めること。(3) Passion: そして、パッション(情熱)を持つこと。情熱があればいろいろなことを得ることが出来ます。情熱があれば、エネルギーや活力がみなぎります。(4) Creativity: クリエイティビティ: 創造的に物事を考えましょう。(5) Humanity & integrity いつも謙虚で誠実であること。(6) Leadership: 最後にあなたはリーダーシップ力を伸ばさなくてはならない。誰にでもリーダーシップ力は備わっていると思います。リーダーとはビジョンを示し、他の人をやる気にさせることだと思います。また、どんな小さなこともより良くしようとすることが大切です。リーダーは誰かのヒーローになるのです。リーダーは「森」を見ることができ、「木々」も見ることができる人です。つまり大きく見渡せることと小さなこ

とも見逃さないことです。あなたが、ホテルや観光産業で成功したいなら、ソフトスキルが必要です。たとえば、コミュニケーション能力、協調性、向上心、身だしなみ、倫理的であることもあなたをサポートします。

夢を信じる人は、将来が開けます。もちろん夢を持つだけでなにもしなければ、夢に終わってしまいます。夢に向かって努力することが大切です。そうすれば未来はあなたのものです。

ありがとうございました。

〔謝辞〕

公開講座の開催にあたりアジア諸国から来学されたナザレチャック氏、パードパッタラパニック氏、ケイ・チョン氏に心よりの感謝を申し上げます。また、本稿では紹介できなかった研究協力者すべての方に心より御礼申し上げます。

なお、本研究は科研費（基盤研究 C）24501167の助成を受けたものである。

表 学生からのフィードバック（学生 平成24年 21名、平成25年 25名、平成26年 19名）

問 1 この講義は充実していて、とてもよかった

	強くそう思う		そう思う		どちらともいえない		そう思わない		まったくそう思わない
平成24 (N=21)	14	66.7%	7	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	0
平成25 (N=25)	9	36.0%	15	60.0%	1	4.0%	0	0.0%	0
平成26 (N=19)	8	42.1%	11	57.9%	0	0.0%	0	0.0%	0

問 2 この講義に参加したことで将来のキャリア（職業）についての意識が高まったと思う

	強くそう思う		そう思う		どちらともいえない		そう思わない		まったくそう思わない
平成24 (N=21)	9	42.9%	10	47.6%	2	9.5%	0	0.0%	0
平成25 (N=25)	13	52.0%	11	44.0%	1	4.0%	0	0.0%	0
平成26 (N=19)	7	36.8%	8	42.1%	4	21.1%	0	0.0%	0

問 3 この講義に参加したことであなたのコミュニケーション力が高まったと思う

	強くそう思う		そう思う		どちらともいえない		そう思わない		まったくそう思わない
平成24 (N=21)	4	19.0%	11	52.4%	5	23.8%	1	4.8%	0
平成25 (N=25)	1	4.0%	15	60.0%	6	24.0%	3	12.0%	0
平成26 (N=19)	2	10.5%	8	42.1%	6	31.6%	3	15.8%	0

問 6 公開講座の実習（運営）は、充実していてよかった

	強くそう思う		そう思う		どちらともいえない		そう思わない		まったくそう思わない
平成24 (N=21)	19	90.5%	2	9.5%	0	0.0%	0	0.0%	0
平成25 (N=25)	12	48.0%	12	48.0%	1	4.0%	0	0.0%	0
平成26 (N=19)	9	47.4%	8	42.1%	1	5.3%	1	5.3%	0

問 7 公開講座の実習（運営）に、一生懸命取り組んだ

	強くそう思う		そう思う		どちらともいえない		そう思わない		まったくそう思わない
平成24 (N=21)	15	71.4%	5	23.8%	1	4.8%	0	0.0%	0
平成25 (N=25)	15	60.0%	8	32.0%	2	8.0%	0	0.0%	0
平成26 (N=19)	7	36.8%	10	52.6%	1	5.3%	1	5.3%	0

〔参考文献〕

- 池田 真 (2011) 「CLIL と英文法指導：内容学習と言語学習の統合」『英語教育』大修館書店
- 和泉伸一, 池田 真, 渡部良典, (2012) 『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たな挑戦：実践と応用』上智大学出版
- 森越京子 (2010) 「北海道のホスピタリティ産業に必要とされる英語教育について」北星学園大学短期大学部北星論集 (8), 39-49
- 森越京子 (2011) 「ホスピタリティ教育と戦略的英語教育」：2009年度共同研究プロジェクトの成果北星学園大学短期大学部北星論集 (9), 81-86,
- 山岸信義, 高橋貞雄, 鈴木正浩 (編) (2010) 『英語授業デザインー学習空間づくりの教授法と実践』大修館書店
- 吉田かよ子・森越京子 (2012) 「短期大学における「総合講義ホスピタリティ」の導入について」日本観光ホスピタリティ教育学会全国大会研究発表論文集
- 吉田かよ子 (2010) 「ホスピタリティ教育と英語教育：2008年度英文学科共同研究プロジェクトの成果,」北星学園大学短期大学部北星論集 (8), 17-37 (2010-03), PDF
- 渡部良典, 池田 真, 和泉伸一 (2011) 『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たな挑戦：原理と方法』上智大学出版
- Hara, T. & Chen, J. (2012a) "MICE, Event and Hospitality Management Curriculum and Strategy in the United States Part I", (in Japanese) P74-75, *Tenjikai to MICE (Exhibitions and MICE)*, 2012 Autumn Vo.5, POC, Tokyo Japan
- Hara, T. & Chen, J. (2012b) "MICE, Event and Hospitality Management Curriculum and Strategy in the United States Part II", (in Japanese) P54-55, *Tenjikai to MICE (Exhibitions and MICE)*, 2012 Winter Vo.6, POC, Tokyo Japan
- Kolb, D. A. (1984). *Experiential Learning: Experience as a Source of Learning and Development*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall
- Lau, C. (2013). *Good Teaching Practice: Learning in the Real World*. [Video] Retrieved from http://www.youtube.com/watch?v=5PJZ_SEBXJo
- Lau, C & Wong, C. (2010). *Understanding the Impacts of Experiential Learning on MICE Education*. *International Convention and Expo Summit 2010*. Retrieved from <http://www.unlv.edu.sg/ices2010/downloads.html>
- Morrison, A., & O'Mahony, G. (2003). The liberation of hospitality management education. *International Journal of Contemporary Hospitality Management*, 15 (1), 38-44.
- Yoshida, K., & Morikoshi, M. (2011) Developing a Hospitality and Tourism Curriculum in a Two-Year College in Japan. *TEAM Journal of Hospitality & Tourism*. Volume 8, Issues 1, December 2011

